

○研修で得たことの活用について

研修の内容は、Stanford University が取り組んでいる最新の研究や臨床についての講義と、様々な研究施設や病院見学、現地スタッフとの交流である。講習と研究施設見学を組み合わせることで理解の向上が促された。最新の医療技術に触れ、現地スタッフと活発に議論できる時間が随所に設けられており、大変貴重で役立つ多くの情報が得られた。中でも、一つの研究において様々な分野のスペシャリストが協力・提携するシステムは非常に興味深く、今後の自分の研究へのスタイルとして大きなヒントとなり得る。それは専門化されていく臨床においても当然関わる点でもある。また、一連のプロジェクトを複数の視点からアプローチされており、これについても大変参考になり、是非とも自分の研究に反映させたい。また、各講師による丁寧な講演姿勢についても参考にしていくつもりである。



7T MRI のボア内に入った体験について現地スタッフと語る筆者
(右から2人目)。左から2人目は Dr.Moseley。

○学会の国際化および学術大会のあり方について

研修期間内において学会の将来構想について討論した。日本国内において、優秀な研究であるにもかかわらず、世界に向けて十分に発信できていない感がある。その対処法として、例えば国際学会との合同開催とすることや、国際セッションの充実、さらに演題(抄録)の英語化などが挙げられる。しかし、国内学会の日本人だけのセッションの演題の全てを英語とすることについては、不自然という見方もある。プログラム委員会の採択により、国外に向けて発信するにふさわしい演題を英語化するなどの方法も考えられ、これらは今後の学術大会のありかたにもリンクする。それは、英語演題を主とした場合、学術大会参加者の動員に影響することが懸念されるからである。しかし、JSRT が世界的に知名度の高い存在を目指すならば、英語ベースとすることは避けられない。演題については、洗練された質の高いものに絞り、演題発表者の参加費を減額や無料とすることで採択されたことへのアドバンテージとし、今後のモチベーションの向上を期待する方向性も挙げられる。また、さらに多くの会員が参加しやすい環境とするために、学会開催場所は、横浜を本会場として地方にサテライト会場を設置することも考えられる。しかし、各会場のネットワークを構築する必要がある、費用面について、また会場設営について地方部会等の負担などが懸念される。学術大会の内容については、教科書や参考文献にて容易に閲覧できるものではなく、理解しにくいこと、学会発表や研究の方法などの具体的な教育講演を増加して学会としての質の向上をめざすこと、また、シンポジウムのありかたとして、優秀な演題を通常の演題よりも時間をかけて発表・質疑応答するという案もある。以上、今後の学会における大きな可能性を議論することができた。